鎮江を経て、揚州へ至る

郷愁をつねに出発するということ

揚州瓊花大厦（チョンホァターシャ）、揚州の南はずれ、揚州汽車站（バスターミナル）の近く、工場街の一角に異物のように突き刺さった高層ビルの一室に、僕はいる。

鎮江から出発したバスが揚州に近づくにつれて、ときおり顔を覗かせていた近代的な塔のようなこのホテルに泊まることになろうとは、まさか思いもかけなかった。

一泊、一五〇元。昨夜の南林飯店、三八五元のことが頭にあったので、意外に安いと感じたのかもしれない。

ともかく、シングルの部屋はどこか機能的な臭いを漂わせていて、この瓊花大厦というホテルは、昨夜の南林飯店の庭園の中の豪邸というコンセプトとは異なり、現代的なビジネスホテル風とでもいう感じなのだけれども、いかんせんその中層一一階のウインド越しに見えるのは、ただただ下町の工場街の黒っぽい屋根だけなのだ。

何はともあれ、雨に濡れてしまった衣服を干して、バスにも入って、僕はとても快適な気分だ。さっき電源のコントロールシステムの調子が悪くなって、部屋の明かりやテレビが全て消えてしまったときにはちょっとあわてたが、服務員の女性は、よくあることとでもいうように、平然としてなおしてくれた。

備付けの小型冷蔵庫から青島の缶ビールを取り出して、ぼんやりとテレビを眺めながら、僕はラッキーだったのかアンラッキーだったのかよく分からない半日を反芻してみる。

＊

バスが自転車やリキシャのひしめきをかきわけるようにして、ようやく蘇州の火車站に到着したのは一二時を過ぎた頃だった。

時間がないので、とるものもとりあえず、僕は急いで候車室へと入っていった。すでに改札が始まってしばらくたつらしく、改札付近には人影はなかった。改札に掲げられた列車番号、三三六次を確認して改札を通り、プラットフォームへと向かった。

車両服務員にチケットを提示して指定された車両に乗り込み、ほっとして座席に腰を下ろすと、すぐに列車は動き始めた。

鎮江までは約三時間半、どこまでも平坦な田園風景が続く。

鎮江という街自体には当てはなかった。僕の次の目的地は揚州だった。

鎮江は長江をはさんで揚州と向かいあい、長江の南側に位置する。広大な長江下流域で長江を渡る橋は数えるほどしかなく、揚州には鉄道が通っていないので、揚州へ至るためにはまず列車で鎮江へ行き、それから船で長江を渡らなければならない。

列車は南京行き。途中下車しなければならないので、列車が停車するたびに僕は時刻表を見ながら駅名を確認していったのだった。

鎮江に到着したのは午後四時前だった。

中国人たちの流れに押されるようにして、出口の改札を抜けると、夕刻近い鎮江站の駅前広場だ。

煙草を吸いながら、広場を見回していると、

「ヤンチョオ、ヤンチョオ（揚州）！」

とさかんに声を上げている男がいる。どうやら揚州行きのミニバスの呼び込みらしい。

行き先を男に確認し、ミニバスに乗り込んで、料金八元を支払う。

乗客は次第に込んできて、車内がぎゅうぎゅう詰めになってから、ようやくミニバスは出発した。

途中、フェリー乗り場直前で、乗客は大型バスに乗り換えて、バスごとフェリーに乗り込む。フェリーはバスやトラック、乗用車が二〇台ほどで一杯になり、長江両岸をピストン運転する。二〇分ほどで、フェリーは対岸に到着。バスは再び揚州を目指して走りだした。

揚州に到着したのは午後五時半頃だった。

夕刻だったからかもしれないが、揚州はどことなくくすんだような空気が漂っている街だった。どことなくゆったりとした流れが感じられた。

これからホテルを捜さなければならないのだが、重たい荷物を抱えて、もしも昨夜のようにホテルが見つからなかったら、と思うとおっくうになってくる。

たぶん汽車站（バスターミナル）には荷物預かり所があるだろから、手軽になってからホテル捜しをしよう、と考えた。荷物を預けたままでホテルに泊まって、揚州を発つときに受け出そう、と。

汽車站前の小さなロータリーを渡ると、すぐに小件寄存処のカウンターが見えた。

カウンターの前で必要な荷物と預けてしまう荷物とを分けていると、ロータリーで遊んでいた少女たちが近寄ってきて、声をかける。

「何をしているの」とか、

「どこから来たの」とか、たぶん。

話しかけてくる言葉の意味はよく分からないのだけれども、小件寄存

処に荷物を預けて（一元）、さて行こうとすると、どうやら宿を紹介すると言っているらしい、しきりについて来いという身振りをする。
「我是日本人」
と言って、泊まれるのか、と確認しようとするのだが、小学生くらいの少女には通じない。
ダメでもともとか、と思いながら、先導する少女についていく。
少女は食べていた揚げもののおやつを差し出しながら、得意そうに客を案内した。
汽車站の裏側へと狭い路地を入っていき、やがて一軒の小さな旅社に着いた。
少女は受付の男と言葉を交わす。
もしかしたら父親だったのかもしれない。男は僕を見て、日本人だと分かると小さく首を振るのだった。
どうして泊まれないのか、どうにも納得しかねるかのように、首を傾げながら、少女は再び僕を汽車站へと連れ戻し、
「私はもう知らないから、あの大きな飯店へ行きなさい」
と告げるのだった。それはバスでこの揚州に到着したときから目についていたホテルで、江陽飯店という看板が出ていた。
交差点を渡り、江陽飯店のロビーへ入っていった。
カウンターで声をかけると女性の服務員が応対した。
「日本人だけれども、泊まれるだろうか」
女性の服務員はとまどって、支配人を呼ぶ。
やって来た支配人はおごそかに告げる、
「この飯店には外国人は泊まれない」
「それでは、外国人の泊まれるホテルを紹介してくれませんか」
「二元くれたら、教えてあげる」
どういうことか意味がつかめなかったのだけれども、「二元をくれたら」と言うのだから、二元札を差し出すと、支配人は
「ついて来い」
と言いながら、通りへ出ていく。
とまどいながらついて行くと、支配人はリキシャを呼び止めて、二元札を手渡しながら、何事かをリキシャの男に告げた。間違いのないようにと、リキシャの登録番号を控える。
リキシャで僕をホテルまで案内させるということだったのだ。
リキシャは汽車站の静かな賑わいを離れて、暗い方へ、なにかがらんとした印象のする工場街の方へと走っていく。
約五分で、リキシャは瓊花大厦に到着した。まさかと思っていた、塔の

ようにそびえる現代的な高層ビルだった。
「高いだろうな。もう一度、汽車站まで戻って、安ホテルを捜そうかな」
と考えながら、フロントで料金を尋ねると、一五〇元だった。
もちろん決して安い値段ではないのだが、日も暮れ落ちて、これからホテル捜しをするのも気が進まなかったし、昨夜のことを考えると割安という感じもあって、チェックインしたのだった。

ホテルの部屋でしばらく休憩してから、夕食のために僕はリキシャで来た道を戻り、汽車站の方へと歩いていった。
通りは暗く、だだっ広い工場の建物はひっそりとしていた。ときおり、小さな屋台がほんやりとした明かりを歩道に投げかけていた。
微かな雨が降り始めていた。
汽車站に戻ってみると、さっきは気がつかなかったのだけれども、道路をへだてた歩道にはずらりと屋台が並んでいた。
天候が良くないからだろうか、客は少なくて、蘇州の観前街に比べるとずっとひっそりとした印象なのだった。
それぞれの屋台には、テーブルがひとつかふたつ、その脇には肉や魚、野菜などの材料を並べた台があり、そのうしろにコンロと中華鍋の調理台がある。客が選んだ材料をその場で調理してくれるという形式で、へたな食堂よりもずっと豊かな食事ができる。仕事帰りにちょっと立ち寄るというよりも、むしろ家族連れで食事を楽しんでいるという様子の客が多い。
ひとつの屋台を選んで、腰を下ろす。久しぶりにちゃんとした夕食を食べようと思って、まず海老と野菜を指差し、料理してもらう。次に肉とニラの炒めもの、最後にごはん.
テーブルの料理に満足しながら食べていると、さっきから降り始めた雨が強くなってきた。まわりを見回すと、客のいない屋台から店じまいを始めたり、ビニールシートで雨を避けたりしている。
テーブルにも料理にも、雨。
あわてて食べおえて、値段を尋ねる。
「シーサンカイ（一三元）」と屋台の主人は答える。

※

僕はまだ中国を旅行するということにおける金銭の感覚をうまくつかめないのだった。
振り返ってみれば、入国して以来、使ったお金のほとんどはホテル代な

のだ。おそらく中国の一般庶民の感覚からいうと目の玉が飛び出るような高いホテルを僕は渡り歩いている。一方では、一歩外へ出ると、二角程度のバスに乗り、食堂や屋台で食事をしても数元だ。一〇元も出せば、列車で一〇〇キロ以上も移動することができる。そのことがどうしても感覚として納得できないのだ。

例えば、一元札というのはどのくらいの価値があるのか、ということが今ひとつつかみきれない。一元＝二〇円という計算をすれば、日本人の感覚として高いとか安いとかいうことは言えるけれども、それは旅の感覚ではない。一週間も旅行を続けていると、円との関係の感覚は薄れてきて、現地通貨の感覚が身についてくる。現地通貨の価値というものが、それ自体として分かってくるものだ。しかし、中国を一週間ほど旅行して、僕はまだ元という通貨の価値をつかまえられない。

考えてみればそれも無理はないのかもしれない。日本円でたとえてみると、普通の食堂で食事をし、普通の交通機関で移動している旅行者が、一泊一〇万円から二〇万円のホテルを渡り歩いているようなものなのだ。これでは金銭感覚がつかめないのも無理はない。

しかしまた一方、そのような高級ホテルに平気な顔をして泊まる中国人というものもまた存在するのだ。たぶん、ある種の特権的な層、例えば共産党関係の政治権力者につながる人々や、開放経済をたくみに泳ぎ渡る経済的な成功者につながる人々なのかもしれない。ともかく、中国には、一角二角の世界と、一〇〇元二〇〇元の世界があって、特に都市部ではそれらが入り混じっていて、貧乏人の外国人旅行者としての僕たちは、思いがけないときにその落差を経験するということになったりするのだ。

揚州の雨の夜。

異物のように工場街の一角に突き刺さった瓊花大厦の一一階シングルルームで、よく冷えた青島の缶ビールを飲みながら、僕は少し異物のような自分というものを感じていた。

中国はここにあり、ウインド越しには雨に濡れた揚州の街が広がっているのに、まるで異物のようにはじき返され、異物のように扱われる自分というものを、少し僕は感じていた。

それはいろんな意味での外国人の特権のことだろうか、普通の旅館には外国人は泊まれないという中国政府の政策のことだろうか、僕は分からない。

僕にはまだ分からないのだけれども。

※

目覚めると、揚州の街は霧に包まれていた。
立ちこめた霧にかすんだはるかな下界を、人々は自転車で、荷車を引きながら、あるいは歩いていく。
工場の物音や、自動車のエンジン音、クラクションの音などがこんぜんと一体になって鳴り渡っていた。
霧にかすんだ工場街の黒っぽい屋根のつらなりと、通りを行き交う通勤途上の人々の姿を、僕ははるかな下界のことのように眺めていた。
それはもしかしたら中国をひとり旅する僕と中国の人々との関係のようなものをあらわす光景かもしれない、と僕は思う。
しかし、僕はそこへ、人々のただ中へ入っていこうと、いくども足を踏み出すだろう。ふと気付いたときに、再び異物としての自分を見出したとしても、もう一度踏み出していくだろう。

瓊花大厦をチェックアウトして、濡れた歩道を汽車站に向かって歩いていると、ホテルの服務員が追いかけてきた。携帯時計を忘れたのをわざわざ届けてくれたのだ。制服に身を包んだ服務員が、何事かを丁寧に告げながら、携帯時計を差し出す。
「謝々、謝々」
と僕は繰り返した。
汽車站の近くで、肉マンの屋台が出ていたので、朝食に立ち食いをした。一元で三個。
ほくほくと食べていると、警官がやって来て、文句を言いながら屋台のおばさんを追いたてる。おそらく、ここは通行のじゃまになるからどこかへ行け、というのだろう。おばさんはあたふたと屋台をおおっていた竹製の大きな傘をしまい、屋台を押しながら追いたてられて行った。

汽車站前からバスに乗って、大明寺（ターミンスー）へと向かう。
市街地を抜けてしばらく走ると、バスはのどかな田園風景の中へと入っていく。
昨夜の雨に濡れた緑は微かな吐息を吐いているようだった。
終点で降りて、何組かの観光客について山道を登っていくと、大明寺の赤い山門があり、脇のチケット売場あたりには観光客が集まっていた。
大明寺は鑑真和尚の名によって知られている。唐の時代、鑑真は日本人青年僧の懇請に答えて、国禁を犯し、五度の難破と失明という困難を乗り越えて、二〇年という歳月をかけ、日本に渡った（七五三年）。その後、鑑真は奈良の唐招提寺で人滅したが、弟子たちは師の等身大の座像を造

り、その偉業をしのんだ。一九八〇年、唐招提寺の鑑真和尚像は揚州大明寺へ里帰りした。約一二〇〇年という歳月をへだてた出来事だった。

山門をくぐってしばらく行くと、鑑真紀念堂があり、鑑真和尚像はガラスケースに収まって沈黙していた。

僕には鑑真和尚像に向き合って何事かを感じるという、その感じたことを言葉にかたどるという準備が何もないのだった。そのための知識もないし、鑑真が命がけで伝えようとした戒律や仏法とは何の関係もない場所から、僕は来たのだ。そこでは仏教が人々の何か核心的なものを律するということもなく、葬式仏教という制度として、節日に立ち上る何とはない仏教的な気分として、仏教はあるだけだ。仏教は仏教として自立的にあるのではなく、むしろ日本的な何物かが仏教的な装いによって立ち上っているのだ。そしてその仏教的な装いは、現在急速に忘れられようとしているのかもしれない。一方で人々は忘れられていくもの、失われていくものに対して郷愁するのだけれども、装いに対する郷愁が鑑真という人の思考と交差するとは思えない。日本人の郷愁、仏教に対する、あるいは中国に対する郷愁。郷愁に安堵するということから常に出発するということ。

僕はとりあえずガラス越しに鑑真和尚像を写真に撮っただけだった。

大明寺山門を出て、山道をしばらく登っていくと、茶畑の脇に「唐城遺址」の石碑があった。かつて唐の時代その繁華を誇った揚州城のなごりだ。いまそこには何もなく、ただ山道が続き、茶畑が広がっているだけだ。山道の向こうにはぽつんと一軒の農家、そして茶畑で作業をする農婦たちの声が、ときおり石碑の前に佇む僕の耳に飛び込んでくる。千年は全てを自然に帰したかのようだった。

山道を降りて、観音山という寺の石段を登っていく。観音山の境内からは揚州市街の方が一望できる。さっきバスに乗ってきた通りの並木が視界を横切っていた。その向こうは微かな霧におおわれた揚州だった。霧に隠れて、やがて消えていく遠景は静か、境内も静かだった。

寺の中では何人かの参拝者たちが、中国式にひざまずき、何度も額づいて祈っていた。何か立ち入ってはいけないもののように思われて、僕は石段を降りていったのだった。

途中、中国人の母娘が、娘が母をいたわるようにして、ゆっくりと石段を降りていた。ゆっくりと降りていく母娘を驚かせないようにと、静かに僕は追い越していく。

大明寺からバス通りの並木道を痩西湖の方へ、僕は歩いていった。どこまでも一本道の田舎道が続く。ときおり自転車に乗った農夫が僕を追い

越していく。学校帰りだろうか、小学校の低学年くらいの子供たちがはしゃぎながら前方を歩いている。しばらくすると子供たちはそれぞれの家の方へ、通りを渡って、帰っていく。揚州郊外の田舎道に、ひとり。

やがて瘦西湖公園入口のにぎわいが近づいてきた。中学生の団体観光のような一団がぞろぞろと入口を入っていった。

窓口で入場料四・五元を払ってチケットを買う。

入場門を入ってしばらく行くと瘦西湖の湖面と、中州へと渡る美しい五亭橋、中州にその頭をのぞかせる白塔が見えてきた。湖岸には枝垂れ柳の並木が続いていた。

少し疲れたので、ベンチに腰を下ろして、景色を眺めながら、煙草を吸った。観光客を乗せたボートが数隻、静かな湖に漂っていた。

瘦西湖はもともと運河だったものを堰き止めて湖にしたもので、細長い形状をしていて、対岸を見てもすぐ目と鼻の先だ。杭州の西湖などとはずいぶん趣が違う。そのコンパクトな景観はむしろとっつきやすい。

湖岸に沿って歩いていくと、二十四橋と呼ばれる、湖を渡る橋と亭台の並んだ一角がある。亭台の白壁や赤い柱、黒い瓦屋根、亭と亭とをつなぐ石廊下のような橋、あるいは太鼓橋のような石造りの丸橋、そこここに顔を覗かせる木立の緑、それらの景観は美しく、若いカップルや観光客たちはお互いに写真を撮りあっていた。

だが、はるか唐代にその由来を持つ二十四橋や清の乾隆年間（一七五七年）に建てられたという五亭橋は、あまりにも新しいのだった。多分古びてしまったものはただちに改築されるのだろう。古びた物は古びたままで、できるだけその様子を損なわないように保存するということに価値を見出す日本人の感性からいうと、その新しさは許せないことのようにも思えてくるのだった。

瘦西湖をひとまわりして、観光客目当ての屋台で腹ごしらえをし、再び揚州の市街地へとバスで向かった。

市街地を横切って、古運河のほとりでバスを降りた。約七〇〇年前、イスラムの布教のためにこの地に滞在した普吟丁（プハーデイン）の墓地がある普吟丁墓園に行ってみようと思ったのだけれども、運河越しに見えた墓園は通りの方からはどうしても入口が見つからない。しばらく入口を捜したあと、あきらめて、バスに乗って汽車站へ戻った。

汽車站から、こんどは工場街のようながらんとした通りを歩いて、文峰塔を目指した。ナントカ机械厂とか制革厂とかいう大きな敷地の工場が延々と続く。大型トラックや、トラクターを改造して荷台を取り付けたよ

うな運搬車がけたたましい爆音を上げながら通り過ぎていく。
本当にこの道でいいのだろうか、と不安になり始めた頃に、ようやく文峰塔が見えてきた。
運河沿いの小道を入っていくと、ただチケット売場の小屋があるだけ。やはりまた、中国的な観光地を想像していた僕は、何も手を加えられないまま捨ておかれたようなその景観にむしろほっとしたのだった。…誰もいない。
退屈そうなチケット売場の女性に入場料を払って、外観通りに年月にくすんだような塔の中に入り、狭い階段を登っていった。
七層八角の文峰塔の最上階に腰を下ろして、いにしえの時代そのままのように見える古運河を眺めた。運河にはたくさんの川船が繋留されていた。それらは全て木造の運搬船で、もちろんエンジンで動くのだから唐代の船とは違うけれども、大筋では風景はそれほど変わっていないのではないかと思われた。かの鑑真はここから船出し、遣唐使たちの多くはここから上陸したのだ。文峰塔自体は一五八二年の創建だから、その時代にはなかったのだけれども。
運河沿いの道を歩いていくと、川船の荷を積み下ろしする作業場があった。男も女も立ちまじって砂利や麻袋の荷を積み下ろし、ときおりトラクター運搬車が爆音をたてた。

汽車站に戻ると、交差点の脇に停めたバスのかたわらで、小型のハンドスピーカーを持った男が
「ナンチン、ナンチン、ナンチン、ナンチン（南京）！」
と連呼しているのが目についた。
その瞬間「よし！南京へ行こう」と僕は決めた。成り行きによっては、揚州にもう一泊するつもりだったけれども。
小件寄存処から荷物を受け出して、呼び込みをしていたバスに乗った。車内は空いていて、楽でいいなと僕は思ったのだけれども、どっこい男は必死に連呼を続けて、満員になるまでは意地でも出発しないという様子なのだ。おそらく乗客数に応じて実入りがあるというシステムになっているのだろう。
乗り込んでから、三〇分ほども待っていただろうか。乗客の中には待つことにイライラとする人もでてきて、早く出発しろ、とどなったりする。険悪な雰囲気が充満して、今にも爆発しそうになった頃に、ようやく南京行きのバスはほぼ満員の乗客を乗せて出発した。
出発すると、すぐに車掌がチケットを売り始めた。九・七元。
広い道路はほとんど直線で、バスは猛スピードで飛ばした。

全長六七〇〇メートルの南京長江大橋を渡り、約二時間でバスは南京の長途汽車站に到着した。午後六時頃だった。